

<p>サケ科魚類の新しい養殖対象種について－Ⅳ～全雌異質三倍体ニジノスケの成長及び成熟状況～</p> <p>三浦正之・岡崎 巧・大浜秀規</p> <p>全雌異質三倍体ニジノスケの成長及び成熟状況を元親となるニジマスやマスノスケと比較した結果，初期の成長は全雌三倍体ニジマスと比べて同等もしくはやや劣ったが，飼育後半になるにしたがって全雌三倍体ニジノスケの方が大きく成長した。また，全雌異質三倍体ニジノスケはニジマスやマスノスケが通常成熟する満3年，満4年で性成熟が起こらなかったことから不妊化したと考えられた。</p>	<p>ポピドンヨードによるヒメマス及びニジマス受精卵の吸水前消毒法</p> <p>三浦正之・岡崎 巧</p> <p>冷水病の垂直感染防止のために，ヒメマス及びニジマス卵を用いてポピドンヨード（有効ヨウ素濃度 50ppm）による受精卵の吸水前消毒についての安全性の検証を行った。両魚種において試験区と対照区の発眼率に差は認められず，吸水前の受精卵消毒は卵の発生に悪影響を及ぼさないと判断された。</p>
<p>低魚粉飼料の有効性評価試験</p> <p>小澤 諒・三浦正之・岡崎 巧</p> <p>低魚粉区には魚粉含量 25%の飼料を，対照区には魚粉含量 50%の飼料を給餌し，両区で飼料効率とコスト指数，糞量，ヘマトクリット値を比較した。最終的な飼料効率は低魚粉区で 78%，対照区で 87%となり，低魚粉飼料のコスト指数は 83.5 となった。糞の沈殿量は低魚粉区の方が多かったが，乾燥重量は当初は低魚粉区が大きかったものの，その後対照区が逆転した。ヘマトクリット値は両区とも正常値であった。これらにより，低魚粉飼料は飼料コストを下げる可能性を示した。</p>	<p>河口湖におけるワカサギ不漁と動物プランクトン相の関係</p> <p>岡崎 巧・谷沢弘将・古屋清春・吉田三男</p> <p>河口湖におけるワカサギ不漁原因究明に資するため，ワカサギの胃内容物，水質環境，動物プランクトン相，稚魚の分布状況について調査した。ワカサギは <i>Daphnia</i> に対する嗜好性が高く，釣りでの不漁原因と考えられた。ワカサギ放流前には仔魚はほとんど採捕されず，河口湖のワカサギ資源は放流によって成立しているものと思われた。<i>Daphnia</i> はワカサギの初期餌料となるワムシ類と競争関係にあり，周年出現する <i>Daphnia</i> がワカサギの初期減耗の間接的な要因になっているものと思われた。</p>
<p>西湖におけるクニマスの産卵環境</p> <p>大浜秀規・青柳敏裕・谷沢弘将・長谷川裕弥（山梨衛環研）</p> <p>クニマス産卵場の礫地において，スキューバ潜水により湖底湧水の湧出状況を調査するとともに，ヒメマス発眼卵の生残状況を確認し，クニマスの保全を図るために必要な産卵環境について検討を行った。湧水の多い場所は限定的であった。ヒメマス発眼卵を湧水が少ない地点に埋設したところ，生残率が 0%で酸欠と考えられた。産卵場湧水の保全はクニマス資源を維持するために重要であると考えられる。</p>	<p>県産アユ種苗の有効活用に関する研究 ～集中放流を行った当所産アユの河川内動態～</p> <p>加地弘一</p> <p>アユを集中放流し，漁場造成の有効性について検討した。放流魚は放流点から約 500m 程度の範囲に分散し，漁期中高密度漁場が維持できた。一部は 3.0km 以上下流でも釣獲され，下流域への資源添加効果が確認された。放流から解禁までの日間成長率は平均 4.1%程度で，顕著な成長停滞は見られなかった。集中放流は，高密度漁場や釣果の維持，下流への資源添加効果があることが明らかになった。</p>